

〈多様ノ統一ノ原理〉再考

— 宮澤賢治におけるグスタフ・フェヒナーとの思想的結節点をめぐって —

木村直弘

序

宮澤賢治が「◎多様ノ統一ノ原理／◎美的明瞭性ノ原理」という思索メモを残しているのを御存知だろうか。「多様ノ統一」あるいは「多様における統一」とは何か。哲学事典を引くと、「統一」とは「多様な諸要素がある点において合致し、一つの全体に共属する関係をいう。この語の原語は、区別されるべき部分を含まぬ単一性や数としての「一」をもさす。統一は多様な部分を前提しつつ、しかも「一」として把握されるべき関係をいう。したがってそれは総合ないしは全体性の概念をとまなう。」¹⁾とある。これを美学的に考えれば、感性に立ち現れる多様な現象が精神によってある種の統一あるものとして認知される時、対象は美しいものとなるわけだが、注意すべきは、統一化は

同一化とは異なる、という点である。すなわち、多様で統一のないものだけでなく、統一があっても単調であれば、美的にはなりえないということになる。

これまで稿者は、先行研究で見過ごされてきたこの思索メモに着目し、まず二〇一〇年に、それと農民芸術概論及び詩「第三芸術」との関連についての論考を発表した。²⁾その後、二〇一九年、改めてこの思索メモを手がかりに賢治の西洋近代美学受容について論じた論考で、大正期から昭和初期に上梓された(訳書を含めた)美学書の殆どが「多様ノ統一」あるいは「多様における統一」について言及していること、しかし「美的明瞭性ノ原理」についてはある特定の美学書にしか挙げられていないこと、つまり、これら二つの美的原理が含まれるのが前掲「農民芸術の本質」用紙書き込みにその名が見られる、精神物理学及び実験美

学の祖グスターフ・フェヒナー (Gustav Fechner 一八〇一—一八八七) によって提唱された「美的快感・不快感に関する六つの一般原理」⁴⁾ について言及している美学書に限られることを指摘し、この思索メモがフェヒナー由来であることを明らかにした。さらに、農民芸術概論綱要に見られる「静芸術」という術語がフェヒナー由来である可能性の高いことも併せて明らかにした。

しかし、ここで注意しなければならないのは、今日に到るまで、フェヒナーの著書『美学入門 *Vorschule der Aesthetik*』全二巻 (一八七六年) のみならず、その主著『精神物理学 *Elemente der Psychophysik*』全二巻 (一八六〇年) ですら邦訳されていないということである。つまり、フェヒナー美学に関する賢治の情報源は当時出版されていた美学書一般の可能性が高いが、それらではフェヒナーの美的原理は概説されているにすぎない。そもそも、「多様における統一」とはフェヒナーの専売特許ではなく、古代ギリシア以来哲学史・美学史・藝術思想史ではお馴染みの語であった。⁵⁾ たとえば、賢治が読んだ可能性が高い金子筑水 (馬治) 『芸術の本質』 (東京堂書店、一九二五年一月二〇日刊) では、先行研究で賢治への影響が指摘されてきたライプニッツのモナド論における「雑多における統一」が「芸術の最高原理」として掲げられており、⁶⁾ 同じく賢治の

同時代人で、賢治童話「土神ときつね」に出てくる新しい「伊太利の」美学書と重なるベネデット・クローチェの『美学原論』 (馬場陸夫訳、大村書店、一九二七年二月二五日発行) でも、「表現は変化若しくは多様の、一体への総合である」と、「多様の統一」について言及されている。⁷⁾

また、賢治の傍線書き入れ本が残る、哲学者・心理学者・美学者のテオドーア・リップスの『美学大系』 (稲垣末松訳、同文館、一九二六年一月)⁸⁾ では、「多様における統一」について、美学書における概説よりもはるかに詳述されている。あるいは、先行研究⁹⁾ によって賢治への影響が指摘されているタゴールの『創造的統一 *Creative Unity*』 (英訳：一九二二年) における「統一と云ふのは、部分と部分との調和であり、又、部分とその諸環境との調和である」¹⁰⁾ といった表現に、「多様の統一」的なイメージを看取することはたやすいし、同じく賢治蔵書にその著「非進化論と人生」 (白揚社、一九二五年九月一〇日刊) が見られるアナキスト・石川三四郎は、「多趣の一味」¹¹⁾ 「多様における統一」を、「アナルシスムの社会組織を考察する場合に重要な標準となるもの」として論じている。¹²⁾

さらに、賢治と「多様の統一」関連で重要なものは、田中智学が標榜した日蓮主義における「妙法蓮華経」による「世界統一主義」志向である。たとえば、智学の『妙宗式目』

講義録（一九〇四年）では、まず最初に、先決問題として「日蓮大聖によりて統一する」「思想の統一」が説かれるが、それは単なる「平等化」「一樣化」「同一化」の意味での「統一」ではなく、あくまでも「多様の統一」を前提としていた。¹²

以上のように、賢治の生きた大正期から昭和初期において、「多様の統一」は、単に哲学や美学の問題に止まらず、左派から右派まで通底する時代のトポスであったともいえる。¹³では、賢治は、こうした多くの「多様ノ統一ノ原理」に関する言説のうち、なぜフェヒナーのそれに注目したのであろうか。

実は、当時フェヒナーの名が人口に膾炙したのは、美学書によってではなく、明治・大正期の心靈学ブーム¹⁴にあつて訳出されたその小著『死後の生活』（平田元吉訳、丙午出版社、一九一〇年、新版・一九二四年）による。『心靈の秘密』（同文館、一九二二年）、『近代心靈学』（日本心靈学会、一九二五年）といった著書もある訳者・平田元吉による『死後の生活』旧版序文には、以下のように書かれている。

フェヒネルは卓越なる自然科学者であつた、事實経験を重ねる学者であつた。彼は同時に宗教心に満ち

たる、詩人的性情を有する哲学者であつた。「死後の生活」は諸科学の事実を基とし、帰納比喩の両法を用ゐ、詩的想像を以て之を補ひ、宗教的情緒を帯びたる、未来生活の描写であつて、正に科学と宗教との靈妙なる融和である。¹⁵

所謂「心靈現象」や「死後の世界」を研究対象とする「心靈学」は、当時「科学」としての心理学の一分野であつた。この心理学だけでなく哲学や美学分野においても有名な自然科学者でまさに賢治に通底する、事實経験を重んじ、宗教心に満ち、詩人的性情を持った人物として当時知られていたのは、この「精神物理学者」フェヒナー唯一人であつた。そこで、この小論では、これまで研究対象とされてこなかつた、美学分野以外の当時のフェヒナー受容と賢治との關係に光を当て、〈多様ノ統一ノ原理〉という思索メモから示唆された賢治のフェヒナーおよびその『死後の生活』との關連について明らかにすることを目的とする。

一 日本におけるフェヒナー受容

賢治の思索メモはフェヒナーの美学原理由来だったが、美学史上、フェヒナーは、それまでの哲学的・思弁的傾向

をもつ「上からの美学」に対して、実験による科学的・経験的美学としての「下からの美学」を、その必須の前提・基礎として提唱した人物として知られている。しかし、実は、フェヒナーが有名だったのは、美学以外の業績によってであった。

たとえば、国柱会発行の日刊紙『天業民報』の、創刊間もない第一号（大正九年九月二五日报）二頁には、珍しく訃報が掲載されており、前月末に没した「実験心理学の科学的独立を完うした碩学」ヴィルヘルム・ヴントのライプツィヒ大学の先達として、「ウエーベル氏やフェヒナー氏の如き心理学者」が挙げられている。ここでイメージされているのは、一八六〇年に上梓された前掲『精神物理学』中で発表され、現代でもよく言及される「ヴェーバー＝フェヒナーの法則」、すなわち、刺激と感覚のあいだに対数的な関係があること（「感覚の強度が刺激価の自然対数に比例すること」）を定式化した法則である。フェヒナー自身、心理学者と称したことがないように、それは心理学の業績というよりも「哲学の副産物」であり、福元圭太の言葉を借りれば、「心理的なものであるとされてきた感覚の数値化、いわば精神的なものの物理化、極言すれば魂の数量化」を目指した、精神科学と自然科学を越境した「精神物理学」という「パラドクシカルな」学問分野の業績であった。¹⁷⁾

この訃報にはヴントが「実験心理学だけでなく民族心理学、倫理学、哲学にも功績を残した」とあるが、ヴントが心理学実験を創始した時はライプツィヒ大学の「哲学」教授であったし、たとえば、前出リップスも、自然哲学、倫理学、心理学、社会学、論理学についての書物を上梓し、論理学以外は当時すでに日本語訳書が出ていることからわかるように、学問分野が細分化されていない当時、一人の学者が（今日的には）多分野にわたって研究を行っていることは特に珍しいことではなかった。よって、一九二一年頃の賢治の主たる読書分野であったとされる「主として医学、心理学、美学、哲学、天文、地質等」¹⁸⁾といった諸分野は当時、現代よりはるかに近接したイメージだったことは看過されてはならない。

ただ、そうした状況に鑑みても、フェヒナーは異彩を放つ存在であったことは確かである。フェヒナーは、当初医学を志し大学に進学したが、当時の医学的方法論への幻滅から物理学に転向、一八三四年に三三才の若さでライプツィヒ大学の物理学正教授となる。その後、一八三九年に病気でその職を辞すことになるが、一八四八年同大に今度は哲学教授として復帰する。その業績は、精神科学、物理学、哲学、美学に止まらず、統計学、数学、生理学、電気化学、物理化学、気象学等の研究にわたって成果を上げ、

色に関する視覚性共感覚の経験科学的研究を初めて行った
りもしている。フェヒナーが、病などの困難にあいながら
も、こうした多様な科学分野での圧倒的な仕事量を単独で
こなしたことについて、ヴントも賞讃したという。さらに
フェヒナーは、同時代フランス物理学の化学を紹介した翻
訳者、家庭用百科事典の編集者、「ミーゼス博士(Dr.
Mises)」というペンネームで多くの詩や風刺的エッセイ
を書いたエッセイスト・詩人でもあり、一八四八年にはプ
ルジョワ市民軍に兵士として参戦したりなど、極めてマル
チなタレントを持った人物だった。¹⁹⁾

よって、フェヒナーは実験心理学的な分野だけで知られ
ていたわけではなかった。たとえば、フェヒナーを「生理
的心理学」の項で紹介している前出・金子馬治の講義録『最
新心理学』(一八九八年)では、フェヒナーについて以下
のように書かれている。

フェヒネルが独逸の学术界に貢献せし所はひとり生理
的心理研究にとゞまらず其の哲学上、宗教上、進化論
上、美学上の所見等も普く学者の注意する所となり心
理学者たると同時に哲学者又美学者として普く世界に
知られたり。其の最初の著『死後の生活』を公にせる
西紀千八百三十六年より引きつゞき四十有余年間の著

述はフェヒネルをして優に独逸学术界の史上に其の名
を止めしむるに足れり。²⁰⁾

ここで注目すべきは、フェヒナーが心理学、哲学、美学、
進化論だけでなく「其の最初の著『死後の生活』」に代表
される「宗教上」の所見も学術的に評価されていたことだ
である。実は、フェヒナーの著書で最初に邦訳されたのは、
前述のように『死後の生』についての小冊子 *Das Buchlein
vom Leben nach dem Tode* (以後「死後の生」と略記)
という小著²¹⁾であり、前掲・平田訳を含め、明治、大正、昭
和、平成に互って翻訳されている。²²⁾ 前出ウィリアム・ジェ
イムズがその英訳本に序文を寄せるなど、²³⁾ この本は、「公
にせる西紀千八百三十六年より引きつゞき」今日に至るま
で世界的に大きな影響力をもち続けており、賢治在世中、
法華信仰などからも注目されていた。²⁴⁾

つまり、前掲・年譜で賢治が「主として医学、心理学、
美学、哲学、天文、地質等」の読書に勤しんだとされる「大
正一〇年頃」は、前述のように日本でも心霊学ブームの時
代であり、当時フェヒナーは美学者としてだけでなく心理
学、そして心霊学方面でその名が知られていたのである。
その一般的イメージを知るために、ここでは学者以外の当
時の一般的なフェヒナー啓蒙の例として、明治・大正期に

翻訳家として多分野にわたる多くの訳書や『日蓮論』（前川文栄閣、一九〇五年、盛岡高等農林学校に蔵書あり）を含む多くの著書もある高橋五郎（一八五六―一九三五）によるフェヒナーへの言及を紹介しておこう。²³

まず、高橋五郎著『神秘哲学』（昌文堂、一九〇三年）では「フェヒネルが主張せる永生説——即ち感化的永生説——」（二二六頁）といった言及がみられるが、特にフェヒナーについて詳述しているのが『最新一元哲学』（前川文栄閣、一九〇三年、盛岡高等農林学校に蔵書あり）である。特に「一元哲学の現在及未来」を論じた第七―九章のうち特に第八章冒頭で八頁（一五一―一五九頁）にわたって「大心理的物理学者フェヒネル氏(Fechner)」（一七二頁）について『死後の生』も含めて紹介されている。その紹介の殆どは、「某氏」による記述の「抜載」だが、その「某氏」による記述も『死後の生』冒頭部からの引用は、前掲註(23)の英訳本からの「転載」となつている。高橋自身の言を引けば、「フェヒネル、ヴントの如き諸大家（生理学と心理学とに精しくして、殊に前者の如きは心理的物理学(Psychophysics)を創設して物理的に心理を研究し始めて心理学界に一新生面を開きし者なれども）も、彼の特殊にして妙絶奇絶なる心霊作用をば到底否認する能はずして、一方には旧式の独断的唯物論を排斥し、他方には一見

甚だ窮したるが如き物霊併行説(精神活動と形体活動と形態と両々並行すてふ説)を唱出せり」(一五八―一五九頁。ちなみにこの部分は、その翌年刊行の高橋著『宇宙論』、前川文栄閣、一九〇四年、四七一頁に転載されている)とあり、「一元主義を持する者は、多くは又物霊並行説を唱ふ」ことに注意を促している(賢治関係でこの書が興味深いのは、続く第九章で、「青森挽歌」に登場するエルンスト・ヘッケルの一元論についても詳しく言及され「物霊合体説」として紹介されていることである)。

次に、同じく高橋著『心靈万能論』（前川文栄閣、一九〇一年、盛岡高等農林学校に蔵書あり）には、「是に於てか心理学は更に講究の方面を一変し、フェヒネル(Fechner)やヴント(Wundt)の如き大心理学者もスピノザの靈物併行観を復活せしめ、殊に前者は心理的物理学(Psychophysics)の首唱者なるにも拘はらず、一種異様の『靈魂不滅論』をさへ書くに至れり」(一〇頁)との言及があり、同書の最後(二六四―二六五頁)で改めて「逸国に於て生理的心理学研究を以て名高く、遂に夫の心理的物理学 Psychophysik づゝ一新心理学を創開せしフェヒネル(Fechner)は其先見の明の大なるや、世人が滔々として唯物論に奔り就くを慨嘆し、夙に一種奇抜斬新なる靈魂不滅論を唱へ出せり、Buechlein vom Leben nach dem

「Tode 即ち是なり、」と言及され、前出『最新一元哲学』でも引かれた『死後の生』冒頭が改めて（少し訳語を変えて）「人は地上に唯一回生活するに非ず、都合三回生活す、其第一生活は全睡時代なり、第二生活は半睡半醒時代なり、第三生活は永遠覚醒時代なり」と引用される。

さらに高橋著『靈魂實在論』（日高有倫堂、一九二一年）第一章には「此種の靈魂不滅説も亦今日に始まれるに非ず、既に希臘に發してありしが、近時に至りては、独逸の大心理学家フェヒネル（Fechner）之を盛んに唱へ出せり、即ち右フェヒネル氏は死後の生命（Das Leben nach dem Tode）といふ一小冊を著はして、奇抜なる靈魂不滅説を吐露せり」とあり、具体的に前掲『死後の生』からの引用を交えつつ言及される（一五頁）。さらに第六章でも「フェヒネル（Fechner）、ヴント（Wundt）の如き、大生理兼心理学者等悉く靈魂の存在を確認するに至りぬ。是決して無意味の事にあらず、大いに注目すべき現象と謂はざる可らず。古来天下諸国の人々が、靈魂の不滅を多少明確に信じたりしは、是また決して無意味には非ず」（二〇九頁）と言及され、改めて前掲『死後の生』冒頭を含む三箇所からの引用を記す（一一一―一二二頁）。

そして、同じく高橋訳のデゼルチス『心靈学講話』（玄黄社、一九一五年、盛岡高等農林学校に蔵書あり）では、

その「訳者序論」に続く「凡例」（二五―二八頁）が「一 心靈学はPsychic Philosophyサイキック・フィロソフィと言つて天下の最新哲学である、所謂『新思想派哲学』とは即ち此学の事である」と始められ、「凡例」の最後は、（同書中に登場しない）「此外独逸哲学者の中にはツエルネルZöllner、フェヒネルFechnerの如き巨匠があつて、其雷名は夙に我が国へも聞えてゐる」と括られる。ここに至つては、心靈学は「哲学」と紹介されている。

以上のように、同一人物によるフェヒナーの紹介でも「大心理的物理学者」「生理学者」「心理学者」「哲学者」と表記が一定でないが、それらに共通して明確に定位しているのは、フェヒナーが唱えた「靈魂不滅説」である。当時、こうした理解は決して高橋だけに限つたことではなかつた。前掲・年譜では、妹トシを失う翌大正一一年二月頃より、賢治が「宗教と、芸術の探求に拍車をかけ」たとされておられ、当時の賢治が、フェヒナーの美学だけでなくその『死後の生』に興味を持ったと考へても無理はない。以下、この小著と賢治の関係について考察してゆこう。

二 先行研究におけるフェヒナーへの言及

まず、先行研究について触れておく。賢治とフェヒナー

の関連について詳しく論じたものは、管見の限り皆無であるが、言及したものととして以下の三件が挙げられる。以下、廻って紹介してゆく。

賢治がフェヒナーの名を記したのは、「農民芸術概論綱要」の「農民芸術の本質」の用紙上欄にメモされた、プラトンに始まり、ヴェインケルマン、カント、シラー、シヨールペンハウアー、フェヒナー、ハルトマン、フォルケルト、リップス、コーエン、クローチエまで十一名の美学・芸術論関係の思想家名が原綴りで没年順に書き込まれたリスト²⁸においてだが、鈴木貞美は、この十一名のなかで特にフェヒナーに注目し、「フェヒナーの哲学は、精神と物質はひとつであり、宇宙を意識的存在と見ることを「昼の見方」、物質すなわち無生物として見ることを「夜の見方」と呼び、「夜の見方」すなわち眠りに落ちた人々を「昼の見方」に目覚めさせることを目指すものだった。このメモがいつ書かれたものかはわからないが、賢治の関心のありどころははっきりしている」と紹介し、「農民芸術概論綱要」中の一節「新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある／正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである」との関連を示唆している。²⁹

ちなみに、鈴木が挙げた「昼の見方」「夜の見方」とは、『死後の生』ではなくフェヒナー最晩年の著作『夜の見方

に対する昼の見方 Die Tagesansicht gegenüber der Nachtsicht (一八七九年) で示されたもので、³⁰ 精神と物質とを分離して考える唯物論的な「夜の見方」に対して、精神物理学的に「精神と物質はひとつ」と考える「昼の見方」をフェヒナーは支持している。岩淵輝によれば、フェヒナーは「光の世界観 [agesansicht] (「昼の見方」) の根本思想として「感性的現象は生物を超えて世界に広がっている」とみなす思想」「感性的現象は一つの至高の意識的統一に関連づけられ完結している」という思想」「人間の意識は、全体的意識に関係づけられ、神の意識に従属している」という思想」の三点を挙げているが、³¹ 鈴木が引く「農民芸術概論綱要」の一節はそうした発想と共鳴し合う。こうして「統一」志向は、後述するように『死後の生』の方でも明示されている。

次に、大塚常樹は、「賢治が『春と修羅』を初めとして、多くの童話の下書稿(初期形)を書いた大正十年代から昭和初期は、まさしく、心霊学が日本で最も関心をもたれた時代であったこと」に触れ、盛岡高等農林学校の蔵書にある心霊学関連の一冊として、平田元吉訳によるフェヒナーの『死後の生活』を挙げている。³² ちなみに、フェヒナーと関連づけされていないが、大塚が、鈴木が挙げた「農民芸術概論綱要」の同じ箇所について「多様の統一」に通ずる

「モノド」論に基づくユナニスム（一つの精神、魂の共有）的世界観」を指摘している点は、看過されるべきではない。³¹⁾

最後に、最も明確に『死後の生』との関連について言及しているのが小野隆祥で、著書の註ではあるが次のように記している。「グスターフ・T・フェヒネル（精神物理学の創設者）は死後の霊が宇宙に充滿し、継続活動しているが、吾人はそれを覚知する官能を有せぬだけであると説いた。彼の無意識に関する説や自我から社会国家宇宙にいたる段階説などが賢治の『綱要』の思想と相通することが認められる」。³²⁾ ここで小野は、賢治が島地大等經由で『死後の生』の訳書に触れた可能性を指摘しているが、他にも賢治がフェヒナーを知るきっかけがあった。それは、賢治が盛岡高等農林学校在校中、英語教師として教鞭を執ったこともある心理学者・小熊虎之助の文章である。次節ではそれについて紹介しておこう。

三 小熊虎之助と賢治

前出・大塚は、心霊学流行下での盛岡高等農林学校蔵書として、小熊講述『心霊現象の問題』（心理学研究会出版部、一九一八年五月二〇日刊。同年九月三〇日付で著者より寄

贈。図書番号…一九七二七）を挙げており、同じく小野も同年秋に「研究生時代の賢治がこれを見落とすはずはない」この本を読んだと推測している。³⁴⁾ しかし、この書にはフェヒナーについての言及はない。

実は、小熊がフェヒナーの『死後の生』について言及したのは、もつと賢治にとつて身近な文献、すなわち盛岡高等農林学校校友会の会報であった。その第三七号（一九一八年一月二〇日発行）に小熊は「心霊現象の研究に就いて」と題された文章を寄稿し、その最後で、「読者の便利を思つて、日本に從來出版された、心霊現象に関する書物」を一五冊ピックアップしている。そのリストの最後に「（一五）平田元吉訳補フェヒネル死後の生活」が挙げられており、³⁵⁾「（一五）は、実験心理学や、実験美学の創立者で、卓越した科学者であつた、独逸のフェヒネルの、人間精神不滅論であつて、哲学説であるだけ、それだけ、私には、非常に面白いもの、様に思ふ。」と説明されている。いたつて簡単な言及ではあるが、賢治がフェヒナーについて興味をもつきっかけには十分なつたと思われる。³⁶⁾

現代においては心霊学と心理学は全くの異分野というイメージだろうが、前述のように賢治が「主として医学、心理学、美学、哲学、天文、地質等」の読書に勤しんだとされる一九二一年に出版された小熊の講義録『変態心理学講

義』第九章「心霊現象の解決」第三節「交霊現象の解決」の「二、死後の生活の哲学観」には、以下のような言及がある。

いま一つは、今は故人となつた米国の哲学者ウイリアム・ジェームズの説である。この人は先のマイアーズの識閥下の自我の説や、また実験物理学の創始者である独逸のフエヒネルの想像などを入れて、大脳と意識との関係を三稜鏡と太陽の光線との関係のやうに、伝達的な関係に解釈しようとしたのである。…(中略) …またフエヒネルはそれよりも以前に、自分の精神物理学の平行説から一種の宇宙意識ともいふべきものを説いてをつた。このフエヒネルの説または寧ろ想像を次に少しく説明してみよう。

自然界を見ると、精神的に一つのものが、物質的の多数と連絡してをる。すなはち、物質的に多様なものが、精神的には一つの、単一の、少くとも一そう単一のものに収縮してをる。換言すると、物質的には互に断絶してをるものが、精神的にはもつと密接に統合し、一つに化してをる。³⁷⁾

ここで注目すべきは、ジェームズに影響を与えたフエヒ

ナーの「説または寧ろ想像」として、「一と多」「多様の統一」的説明が施されていることである。当時、「フエヒナーについて」という章を含む、ジェームズのオックスフォード大学での講演録『多元的宇宙 A Pluralistic Universe』(一九〇九年)の邦訳はまだ出ていなかったが、ジェームズの哲学分野での主著である講演録『プラグマティズム Pragmatism』(一九〇九年)の翻訳本は出版されている。そこではフエヒナーについての直接的言及はないが、第四講として「一と多」が立項されており、たとえば、「抑も哲学とは世界の統一を求むるもの、世界の統一を夢みるものとして屢々定義せられた。…(中略) …抑も吾人の知力がまさしく之れをしも得んと欲して居るものは、統一を離れた雑多でもなければ、雑多を離れた統一でもない。実は一に包括せられた全体である」といったように、「多様における統一」関連の議論がなされている。³⁸⁾ そもそも賢治が詩「林学生」(「春と修羅第二集」)において「天台、ジェームスその他」を並列できた要因は、天台思想の根本教理で田中智学も「法華經の大精神」と位置づけた「一念三千」³⁹⁾ あるいは「一即多、多即一」と、ジェームズの「一と多」論に、「多様の統一」的発想が通底しているからと考えるもよいだろう。

小熊も述べているように、「一と多」だけでなく「宇宙

意識」等も含めて、これまでジェイムズ由来と考えられていた多くの視点が、実はフェヒナー由来である。たとえば、『定本宮沢賢治語彙辞典』における、

ジェームズの目指す世界と個人の関係は、「一と多とはこの世界では絶対に等位のものである」(『プラグマティズム』一九〇七)の一言に尽きている。彼によれば、世界が一であることは目的の統一以外にはありえない。…(中略)…ジェームズは心靈現象への關心を示し、死者との通信を認め、生理学的に説明しようとした。詩「青森挽歌」等で、亡妹宮沢トシとの通信を模索し、科学的にも実証したいと願う賢治にとって、ジェームズの宗教思想は極めて刺激的なものだったといえる。⁴⁰⁾

といった説明は、そのままフェヒナーに当て嵌められる。次節ではそれを『死後の生』の中で確認してゆこう。

四 フェヒナー『死後の生』における「多様の統一」

まず、フェヒネル『死後の生活新版』(平田元吉訳、丙午出版社、一九二四年一月一日発行、盛岡高等農林学校・

図書登録番号…二五七八九)の目次を挙げておくと、「原著者の序」「第一章 総説、生活の三階段」「第二章 来世の体の形成」「第三章 来世の靈の各人に及ぼす影響」「第四章 来世の靈の人類に及ぼす勢力」「第五章 死者との交通」「第六章 死後他の靈との関係」「第七章 現世と来世との状態比較」「第八章 来世の卓越自由」「第九章 来世の体の拡張、地球は活物」「第十章 幽明両界の門戸、幽霊」「第十一章 人と神」「第十二章 結論」「原著者の跋」となる(ちなみに各章の標題は訳者によるもので、原著にはない)。日本におけるフェヒナーの死生観受容を調べた岩淵輝は、『死後の生』が四回も翻訳出版されている理由として、日露戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦といった戦争が当時の人びとに死を強く意識させたことを挙げているが、⁴¹⁾妹トシを失った当時の賢治にとっても、死者との交通⁴²⁾「通信」が最大の関心事であり、それが『春と修羅』に反映されているのは言うまでもない。たとえば、『死後の生活新版』第六章冒頭を引けば、

死後人が現世に於て最も愛した人と再会し、之と交通し、従前の関係を新にしやうとの、皆人が抱いて居る切望は、嘗て予想され約束されたよりも、一層完全に遂げらるゝのである。

此世に於て精神的要素が共通であつたがために結合した人々は、次世にて相逢ふのみでなく、此要素に依りて、一体となり生長するのである。該要素は、彼等に共同な精神的肢となり、而してこの肢は、両者が一様に意識を以て、自分の有とするのである。⁴²⁾

とある。ここに示された、「多様の統一」的発想に基づく、死者との交通についての（就中下段の）文章は、妹を失つた賢治の心に大きく響いたことであろう。

ここでの「多様の統一」のイメージについて理解するには、フェヒナーの説く「生の三段階」について知っておく必要がある。フェヒナーは人が地上で一度ではなく三度の生を生きるとし、アナロジイを用いて次のように述べる。まず、第一段階の生は「胚種」の状態、孤独に暗闇に生きる「絶えざる睡眠」とされる。次に、「誕生」を経て、周囲に光はあるが他者と分離されて「睡眠と覚醒」が交互に起る第二段階の生に至ると、「胚種」状態から「霊」が発達し、次の段階に必要な機関を備える。そして「第二の（誕）生」とも言える「死」を経て、最高の霊の内に他の霊と「纏結」する高等な第三段階の生では、「神的胚種」が発達し「永久の覚醒」となる。つまりこの第三の生が「死後の生」のだが、この「死後の生」で重要なのは、人の

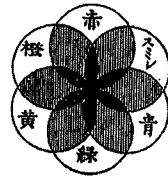
精神は他人の精神と「纏結」し高次の精神的有機体となりとされていることである。たとえば、「高等の霊は、個人に宿るのみならず、その各自が、幾人にも分れて宿るからして」、「凡て相互に何か精神的共通を有する人々は、一緒に同一の霊の体に属し、而して此の霊より出で、彼等に入りたる観念に服従すること、相属する肢の体に対する如くである。」⁴³⁾といった説明は、更に以下のように敷衍される。即ち、

社会国家、通商貿易の徐々たる発達、科学芸術の進歩、又た此等人生の諸範囲が、益々発展して大となり、調和せる諸肢を有する全き体に組織せらるゝこと、此等は皆な、人類界に生活活動する無数の霊的個体が集合生長して、一層偉大なる精神的有機体となつた結果に外ならぬのである。⁴⁴⁾

たとえば「農民芸術概論綱要」序論における「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する」あるいは「新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある」というフレーズが、まさに、フェヒナーのこうした「多様の統一」言説と響きあっているのは言を俟たない。

さらに、『死後の生活 新版』第三章で言及される「その

自己の所有たると同時に、此等の高等なる靈の所有であつて、何れのものに属するとも區別することは出来ない」とものとしての「人間の靈」についての具体的な例を挙げておこう。フェヒナーは図を掲げ、次のように説明する。



丁度此図に於て——此図は摸写でなくして只だ象標或は比喻のつもりである——中央の諸種の色（現図にては黑色）の六の斜光にて成る星形は自己内に内的統一を有する独立のものとなる。而して其の斜光は皆な其中心に従属し、之に依りて統一的に結合されて居る。然れども他方には此等の斜光は皆な夫れ／＼、亦た自分で内的統一を有する六種の単色の円の連結より融合し成つた如く思はれ、而して各斜光は自己に属すると同時に、此斜光の依りて以て生ずる交錯する円にも属するのである。人間の靈に於ても、丁度此の如くである。⁴⁵

つまり、フェヒナーにとって人間の靈は、（外的にみれば）他者の靈から独立した「多」であると同時に（内的にみれば）他者の靈が統一された「一」でもあるわけだが、こうした発想は、まさに『春と修羅』序の「あらゆる透明な幽霊の複合体」や「すべてがわたくしの中のみんなであるやうに／みんなのおおのなかのすべてですから」といったフレーズの出自の一つと考えられうるし、「多様ノ統一ノ原理」とも結びつけられうる。

ここで再び前掲の先行研究を振り返っておけば、大塚常樹は、前掲「農民芸術概論綱要」のフレーズについて、「ここに示されているのは、『個人』の自我が段階的に拡大昇華し、或いは有機的に『多』と連続して行く（重々無尽）ことによつて、一つの『巨きな意識』になるという、まさに『モナド』論に基づくユナニミスム（一つの精神、魂の共有）的世界観である」としていた。ここで指摘されている「『モナド』論に基づくユナニミスム的世界観」のイメージは、フェヒナーではなくライプニッツに根ざしているが、これまで明らかにしてきたように、この説明は、ライプニッツの「個にして多」即ち「一と多」論に影響を受けた前掲フェヒナー「死後の生」における言説に、そのまま当て嵌められうる。

また、『春と修羅』序「あらゆる透明な幽霊の複合体」

に関して、山根知子がこの「複合体」について、小態虎之助の論考「潜在意識の話」(『変態心理』第三号、一九一九年三月、二〇〇～二二二頁)からの影響を指摘しているが、⁴⁷⁾すでに紹介したように、そうした小態の理解は、実はジェイムズを介してのフェヒナー由来だったとも考えられるのである。⁴⁸⁾

結びにかえて

以上見てきたように、賢治の思索メモにあったフェヒナーの美学由来の「多様ノ統一ノ原理」は、先行研究によって賢治への影響が指摘されてきた、ライブニッツ、ジェイムズ、リップスあるいは田中智学らにも通底する重要な視点であった。しかし、その中で特に賢治がフェヒナーのそれに注目した理由は、その「下からの美学」の一原理として、フェヒナー『死後の生』における「多様の統一」への関心であったと考えられるのである。ただ、田中智学における「多様の統一」が結局「普遍宗教」志向の「全体的同一」へとニュアンスを変えて行ったこともあり、賢治の「多様の統一」への関心が晩年まで継続したかどうかについては、検討の余地がある。

あくまでもこの小論の目的は、思索メモ「多様ノ統一ノ

原理」を手がかりに、これまで賢治関係の各種事(辞)典類において立項も言及もされなかったことのないフェヒナーとその『死後の生』についての注意を喚起することにあつたが、紙幅の関係上、『死後の生』の内容についての詳しい説明は省略せざるをえなかった。しかし、この書を初めて邦訳した平田元吉は、訳書の最後で「附録 フェヒネルの生活及哲学」としてフェヒナーの生涯と思想に関して詳しく紹介しており、⁴⁹⁾賢治が『死後の生』以外のフェヒナーの思想に興味を持ったとしても不思議ではない。いずれ『死後の生』を含めてフェヒナーから賢治作品への影響関係は、今後賢治研究において具体的に考察されるに足るテーマであると思われる。この小論がその足がかりとなればそれに勝る喜びはない。

註

- (1) 『哲学事典』(平凡社、一九七一年)九九九頁。
- (2) 木村直弘「宮澤賢治(農民芸術概論)の地平——「多様ノ統一ノ原理」をめぐる——」(『岩手大学教育学部研究年報』第七〇巻、二〇一一年、一七～四三頁)。
- (3) 木村直弘「宮澤賢治における西洋近代美学受容研究序説——(思索メモ5)を端緒として——」(『岩手大学人文社会科学部宮沢賢治いわて学センター編『賢治学第六輯』、杜陵高速印刷出版部、二

〇一九年、二〇一〜二二五頁)

(4) フェヒナーの美的快感・不快感に関する六つの一般原理について詳しくは、竹内敏雄編『美学事典』増補版、弘文堂、一九七四年、六九頁参照のこと。ちなみに、六つの原理のうち、第三が賢治思索メモの「多様ノ統一ノ原理」、第六が「美的明瞭性ノ原理」に当たる。

(5) この「多様の統一」「多様における統一」は、「一」は「多」を、「多」は「一」を前提とした「一と多」という形で論じられることも多く、先行研究によつて賢治への影響が指摘されてきたアメリカの心理学者・哲学者ウイリアム・ジェイムズも、この「一と多」について「古来より論じ古された問題」であると同時に「今や之れを以てあらゆる哲学問題中の最も中心に位するもの」であるとしている(ウキリアム・ゼームス『最近思潮 実際主義 原名(プラグマティズム)』、北沢定吉・吉田圭・西山愨治共訳、弘道館、一九一〇年、一七七〜一七八頁)。ジェイムズの「一と多」論と賢治との関係については、以下の拙稿で詳しく論じたので参照されたい。木村直弘「宮澤賢治(多様ノ統一)への志向(補説)——童話「ピチテリアン大祭」におけるプラグマティズム的(一と多)の表現をめぐって——」(岩手大学人文社会科学部宮沢賢治いわて学センター編『賢治学 第七輯』、二〇二〇年、一三六〜一八一頁)。

(6) 金子筑水(馬治)『芸術の本質』(東京堂書店、一九二五年一月二三日刊)一〇五頁参照。

(7) クロオチエ『美学原論』(馬場陸夫訳、大村書店、一九二七年)五一頁。「土神ときつね」における「美学」の含意について論じた以下の拙稿も併せて参照されたい。木村直弘「宮澤賢治(土神ときつね)管見——狐はなぜ「美学」をかた(語・騙)るのか——」(岩手大学教育学部研究年報 第七一号、二〇一二年、六九〜八八頁)。

(8) 賢治が所有していたリップス『美学大系』の全訳本(稲垣末松訳、同文館、一九二六年七月二〇日発行)は総頁数一六〇八頁に及ぶ浩瀚な書物で、賢治の傍線書き入れ箇所は、総計八六三箇所にのぼる。詳しくは、杉浦静「資料紹介」リップス『美学大系』(書き入れ本)、『宮沢賢治研究 Annual』第九号、一九九九年、一六〇〜一八六頁)を参照のこと。ちなみに、傍線記入があるのは第一三〇七頁、第二巻第四編第一章までとなり、賢治がこの大著を最後まで読み切ったかどうかはわからない。

(9) たとえば、山根知子「宮沢賢治妹トシの拓いた道——銀河鉄道の夜」へむかって(朝文社、二〇〇三年)一六一〜二〇九頁参照を参照のこと。山根も指摘するように、タゴールの「統一」志向は、成瀬仁蔵が説いた「帰一」思想とも共鳴する。併せて、前掲・拙稿(二〇二〇年)も参照されたい。

(10) タゴール「創造的統一」(古館清太郎訳、春秋社、一九二九年)八頁。ちなみに、この書は賢治が所蔵していた『世界大思想全集』の第三九巻である。

(11) 石川三四郎『社会美学としての無政府主義』(共学社、一九三二年) 五頁。この石川三四郎の社会美学は、「振動」による「共鳴」

「感染」を重視している点でタゴールとも共通しており、トルストイの芸術論とともに賢治童話「セロ弾きのゴーシュ」に大きく影響したと考えられる。詳しくは、以下の拙稿を参照のこと。

木村直弘「(摩擦)〈震動〉〈感染〉——宮澤賢治「セロ弾きのゴーシュ」におけるトルストイの芸術論と石川三四郎の動態社会美学のインターフェイス——」(岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要) 第一〇号、二〇一一年、五五〜八四頁。

(12) 『妙宗式目』講義録(第一回)(準備講演の巻)。(筆記主任：山川伝之助(智応)、一九〇四年一月一日) 田中巴之助(智学) 講述・山川智応整記『日蓮主義教学大観 第一巻』(天業民報社、一九二五年二月三日) 二〜六頁参照。こうした田中智学の「統一」志向や成瀬仁蔵の帰一思想と、賢治の「多様ノ統一」志向との関連については、前掲・拙稿(二〇二〇年)で詳述したので参照されたい。

(13) 前掲・金子筑水(本名：馬治)は、日本へのシェリング美学やベルグソン美学の紹介者としても知られる哲学者・心理学者だが、いわゆる「大正教養主義」に属し、狹義の「文化主義」、すなわち芸術による「文化」の現実化、「グローバルな価値理論としての「文化統一」を主張した」人物でもあった。詳しくは以下の文献を参照のこと。大橋容一郎「文化主義の帰趨——新カント学派の哲学

と「文化主義」——」(『思想』第一一三五号、二〇一八年) 二二五頁。哲学関係の賢治の同時代人で言えば、前出ジェイムズの影響下にある西田幾多郎が論じた「絶対矛盾的自己同一」も「一と多」論の範疇に入る。

(14) 明治期以降、森鷗外、夏目漱石、萩原朔太郎、川端康成、梶井基次郎ら名だたる文学者が心霊学の影響を受けたことが多くの先行研究で明らかになっている。その概略は、「心霊文学」として賢治作品(詩)「河原坊(山脚の黎明)」、「童話」月夜のでんしんばしら」を収めている以下の文献の、「霊と近代日本文学の邂逅 序にかえて」と「近代日本心霊文学略年表(一八四八〜一九六〇)」を参照のこと。一柳廣孝・安藤恭子・奥山文幸共編『霊を読む——近代日本心霊文学セレクション』(著丘書林、二〇〇七年) 五〜一四頁、二一〇〜二二一頁。また当時の心霊学ブームについて詳しくは、以下の文献を参照のこと。一柳廣孝『こっくりさん』と『千里眼』——日本近代と心霊学(講談社、一九九四年)。

(15) フェヒネル著『死後の生活 附録：フェヒネルの生活及び哲学』(平田元吉訳、丙午出版社、一九一〇年九月七日刊) 三〜四頁。ちなみに、訳者・平田元吉(一八七四〜一九四二)は、東京帝国大学の哲学科を卒業後、一九〇六年よりドイツ語講師として第三高等学校に赴任し、長年教授を務めた。志賀直哉の英語の家庭教師もしていたという(富士正晴「同人雑誌『三人』成立」『富士正晴作品集二』岩波書店、一九八八年、八七及び九八頁参照)。

(17) 福元圭太「魂の計測に関する試論——グスタフ・テオドル・フェヒナーとその系譜(一)——」(『かいろす』第四七号、二〇〇九年)三五頁参照。

(16) 門林岳史はエドウィン・ボーリング『実験心理学の歴史』*History of Experimental Psychology* (一九二九年)に依拠しつつ、「フェヒナーの心理学への貢献は『彼の哲学の副産物』に過ぎず」彼「自身心理学者と称したことはない」としている。門林岳史「名の流通——(フェヒナー)について——」(『表象文化論研究』第一号、二〇〇三年)一〇九頁参照。

(18) 宮澤清六編「宮澤賢治年譜」(草野心平編「宮澤賢治研究」十字屋書店、一九三九年)巻末一〇頁。

(19) 福元、前掲論文、三三三〜三四頁参照。フェヒナーの全体像については、以下の文献も参照のこと。岩淵輝『生命の哲学——知の巨人フェヒナーの数奇なる生涯』(春秋社、二〇一四年)、山下恒男『フェヒナーと心理学』(現代書館、二〇一八年)。

(20) 金子馬治講述『最近心理学』(東京専門学校、一八九八年)二八一〜二八二頁。フェヒナーについては、同書「後編 独派最近心理学」の章中、「第四 ヴント」に先立つ「第三 フェヒネル及び生理的心理学」の節(二八一〜三〇九頁)で論じられている。

(21) このフェヒナーの小著『死後の生』の原著はハンネイムのミーズ博士名義で出版された。Dr. Misses (Gustav Theodor Fechner), *Das Buchlein vom Leben nach dem Tode* (Dresden: Ch. F.

Grunner, 1886) その後フェヒナー自身の名前で第二版(一八六六年)と第三版(一八八七年)が生前に刊行され、死後欧米でも今日に至るまで更に多くの版を重ねている。

(22) 『死後の生』の訳書は、以下の通り。フェヒネル著『死後の生活 附録：フェヒネルの生活及び哲学』(平田元吉訳、丙午出版社、一九一〇年九月七日刊、新版：一九二四年一月一日刊)、フェツヒネル『死んだら如何なるか』(田宮馨・意訳、帝国神秘会、一九一六年一月一日刊、豆本版：一九四六年刊)、フェヒネル『死後の生存』(佐久間政一訳、北隆館、一九四八年)、フェヒネル『宇宙光明の哲学・靈魂不滅の理説』(上田光雄訳、光の書房、一九四八年、※該当する「靈魂不滅の理説」は、同書三一八〜三九〇頁所収)、グスタフ・フェヒナー『フェヒナー博士の死後の世界は実在します』(服部千佳子訳、成甲書房、二〇〇八年、※英訳本からの重訳)。

(23) Gustav Theodor Fechner (trans. by Mary C. Wadsworth, with an introduction by William James), *The Little Book of Life after Death* (Boston: Little, Brown, & Company, 1904) ちなみに、盛岡高等農林学校には、前掲・平田による第三版を訳した新版の前に、ジェイムズによる序文はない一九一四年刊行の英訳本 (Gustav Theodor Fechner, trans. by Hugo Wernicke, *On Life after Death*, 3rd ed. Chicago & London: Open Court Co., 1914) がすでに所蔵されていた(図書館番号：二二六八二)。

(24) たとえば、一九一四年一〇月と二月には、創刊間もない法華会発行の雑誌『法華』に「名著紹介」として「フェヒネルの死生観」という記事が掲載されており、『死後の生』の著者として、フェヒナーが法華信仰側からも注目されていたことがわかる。石田羊一郎「名著紹介 フェヒネルの死生観 上」(『法華』第一卷第六号、一九一四年) 九二〜九八頁および同「名著紹介 フェヒネルが生死観(中)」(『法華』第一卷第七号、一九一四年) 八三〜九六頁参照。ちなみに、戦後、宮澤清六がこの法華会の講演で、戦時中に「いろいろいやな思い」をしたが「その中でこの会で出版された『法華』という本で、大変助けられた」と述べており、賢治も生前この雑誌を読んだ可能性は十分ある。宮沢清六「総会講話(2) 随想」(『法華』第六二巻第七〜八号、一九七六年八月) 四七頁参照。

(25) 岩渕輝によれば、日本で初めてフェヒナーの名が紹介されたのは、日本で最初の心理学者として知られる元良次郎(一八五八〜一九一三)が東京帝国大学で我が国初となる「精神物理学」の講義を行なった一八八八(明治二二)年であり、東京帝国大学文学部哲学会編『哲学会雑誌』の掲載記事(H・O「新心理学」、同第二〇号、四八七〜四九三頁、「心物理学科」同第二二号、五六六〜五七一頁、「フェヒネル」、同第二三二号、六三四〜六三八頁)中である(ちなみに、最後の「フェヒネル」で『死後の生』の紹介がなされている)。また、哲学・美学分野では、大西祝せきのぶの講演録『読我観小景』(『六合雑誌』第一四六号、一八九三年、七三〜八八頁)

に『死後の生』からの引用がみられるのが初出である。以上を含む日本におけるフェヒナー『死後の生』の受容について詳しくは、以下の文献を参照のこと。岩渕輝「グスタフ・フェヒナーの死生観のわが国における受容——『死後の生』についての小冊子』の多種類の邦訳——」(『明治大学人文科学研究所紀要』第八一冊、二〇一七年、一三五〜一七二頁)。

(26) 用紙に書かれた思想家名は以下の通りであるが、それらの中にはスペルミスが見られる。「Plato/Winkelmann (P:P:正しくは Winckelmann) / Kant/Schiller/Schopenhauer/Fechner/Hartmann/Folkelt (P:P:正しくは Volkelt) / Lipps/Cohaan (P:P:正しくは Cohen) / Croze (P:P:正しくは Coce)」【新】校本宮澤賢治全集 第一三巻(下) 校異篇(筑摩書房、一九九七年) 六頁参照。

(27) 鈴木貞美『宮澤賢治 氾濫する生命』(左右社、二〇一五年) 四一三頁。

(28) 部分訳が、前掲・『宇宙光明の哲学・靈魂不滅の理説』の前半にある。ちなみにフェヒナーの著作の邦訳があるのは、これと前掲『死後の生』のみである。

(29) 岩渕輝「グスタフ・フェヒナーの〈光の世界観〉——一九世紀生命思想の現代的意義——」(『明治大学教養論集』通巻四三四号、二〇〇八年) 八頁。

(30) 大塚常樹『宮澤賢治 心象の宇宙論』(朝文社、一九九三年) 二

〇八〜二〇九頁参照。

(31) 同前、四〇頁参照。

(32) 小野隆祥『宮沢賢治の思索と信仰』（泰流社、一九七九年）三
四頁。

(33) 大塚、前掲書、二〇九頁参照。

(34) 小野は、同書が大正七（一九一八）年九月三〇日の著者寄贈で
あり「しかも序文は四月三〇日、盛岡で記されているから、研究
生時代の賢治がこれを見落とすはずはない」としている。小野、
前掲書、二五六頁参照。

(35) 小熊虎之助「心靈現象の研究に就いて」（盛岡高等農林学校校
友会『校友会雑誌』第三七号、一九一八年二月一〇日発行）一
一頁。

(36) 同前、一一〜一二頁。この号の一四八頁には「消息 農学第二部」
として「○宮澤賢治君 母校農芸化学科にありて研究中の処辞任
帰郷せらる」という記事が見えるが、賢治が盛岡高等農林学校地
質学研究科を修業するのは、一九二〇年五月二〇日付けであるか
ら、この号を賢治が読んだ可能性は極めて高い。ちなみに、一九
一八年四月一日付けで同校嘱託講師（図書館兼務）となっていた
小熊は、県立盛岡中学の嘱託講師も兼務、その後、一九二〇年二
月一八日付けで盛岡高等農林学校教授に就任、一九二三年四月二一
日までその任にあった。詳しくは、以下の拙稿・註（34）を参照
のこと。木村直弘「宮澤賢治影への射程——アンデルセン童話と

いう回路をめぐって——」（岩手大学宮澤賢治センター編『賢治学
第一輯』、二〇一四年）一七三〜一七四頁。

(37) 小熊虎之助述『変態心理学講義』（変態心理学講義録第二編、
日本変態心理学会、一九二二年）二六六〜二六八頁。ちなみにこ
こでの「変態」とは、現代での用法とは異なり、ヒステリーや変
性意識等を意味しており、当時は心理学で心靈現象が取り扱わ
れていたことがわかる。

(38) ウェリアム・ゼームス『最近思潮 実際主義』（北澤定吉・吉田
圭・西山慈治共訳、弘道館、一九一〇年一〇月三日発行）一七八
〜一七九頁参照。

(39) ちなみに、田中智学も「妙法蓮華経」による「世界統一主義」
を主張するにあたり、「一念三千」を「法華経の大精神」とし、「法
華経本迹二門二十八品の中にも『一念三千』といふ名目は無い、
然るに天台大師も日蓮聖祖も、公々然として『一念三千が家の法
華経である』と主張したではないか」と断じている。田中智学『日
蓮聖人乃教義 一名「妙宗大意」』（師子王文庫、一九一〇年三月一
六日発行）五一〜五二頁参照。

(40) 原子朗『定本宮沢賢治語彙辞典』（筑摩書房、二〇一三年）三
一七〜三一八頁。「ジェームズ」の項。

(41) 岩渕、前掲論文（二〇一七年）一六七頁参照。ちなみに、同頁
で岩渕は、四人の訳者に共通する態度として「科学技術と物質文
明の発展につれ精神的な危機が生じていることを危惧し、そうした

危機を乗り越えるために、科学と宗教の両者に深い理解があり両者を止揚・融合できる人物の出現を待ち望んでいた」としている。

(42) フェヒネル『死後の生活新版』（平田元吉訳、丙午出版社、一九二四年）七一〜七二頁

(43) 同前、五三〜五四頁。

(44) 同前、五五頁。

(45) 同前、四三〜四四頁。

(46) 大塚、前掲書、四〇頁。

(47) 山根知子「宮澤賢治」或る心理学的な仕事の仕度」と同時代の

心理学との接点——「科学より信仰への小なる橋梁」——（プラッ

ト・アブラハム・ジョージ&小松和彦編『宮澤賢治の深層——宗

教からの照射』法藏館、二〇一二年）四六三頁参照。

(48) 小熊には『ウィリアム・ジェームズ及其思想』（心理学研究会、

一九一九年七月二五日発行）という著書もあり、フェヒナーの『死

後の生』における「普通意識の「波動説」への言及もみられる（同

書、一八六〜一八七頁）。加えて賢治への影響を考えたとき、小熊

は、ジェームズがフェヒナーを「^{ヴェイゼン}霊覚をもった人」としたことを

そのままジェームズその人にも当て嵌めつつ、ジェームズの全著

作について、「いかに平面的な哲学の世界のうへに位した、立体的

な詩の世界を叙述し、讚美せんとしてをつたらうか」「彼は常に詩

の世界を讚美したゞけではなく、自分の哲学に、この芸術の世界

を絶えず、いれやうと努めたのであつた」と、ジェームズの哲学

と詩的世界との連関について強調していることも看過されるべきではない（同前、五八〜五九頁参照）。

(49) 平田元吉が訳書『死後の生活』の最後に加えた「附録 フェヒネルの生活及哲学」（新版では一四三〜二七七頁）は、「フェヒネルの生活」と「フェヒネルの哲学」の二部から成り、前者は「前半の時期、科学時期」（一、幼年学生時代）（二、科学研究）（三、奮闘的生活）と「後半の時期、哲学時期」（四、哲学的著述『死

後の生活』）（五、精神物理学、美学）（六、フェヒネルと降神術）（七、

晩年、為人、習慣）、後者は「一、緒論」「二、生命の起原」「三、

意識の成立」「四、不死説」「五、結論」という章立てになっている。

平田による「序」（旧版の五〜六頁）によれば、平田が編述にあつ

て主に参考としたのは、「フェヒネルが誕生百年祭に於けるゲルヘルム・

ヴントの講演」及び「フロムマン発行のラスギイツ著フェヒネル」で、特に「哲学」部分の叙述はヴント講演の抄訳に近い

こととわられている。それらの原著と考えられる文献は、以下の

通り。Wilhelm Wundt, *Gustav Theodor Fechner: Rede zur Feier seines hundertjährigen Geburtstages: Mit Beilagen und einer*

Abbildung des Fechner-Denkmal (Leipzig: Wilhelm Engelmann, 1901) 及び

Kurd Labwitz, *Gustav Theodor Fechner* (Stuttgart: Friedrich Frommann, 1896)

※賢治テキストの引用はすべて『新』校本宮澤賢治全集（筑摩書房）

に依った。

〔附記〕本稿は、二〇一八～二〇二〇年度JSPS科学研究費基金・基盤研究(C)「宮沢賢治文学の国際的な普遍性と受容可能性に関する包括的研究」(P18K00495) 研究代表者・山本昭彦)による研究成果の一部であり、第二九回宮沢賢治研究発表会における研究発表「〈多様ノ統一ノ原理〉再考——宮澤賢治におけるフェヒナー、リップス、田中智学との思想的結節点をめぐって——」(二〇一九年九月二三日、於宮沢賢治イーハトーブ館ホール)に基づく。